

自給飼料養豚の経済性について

松藤正伝・森 国男

(長崎県総合農林センター)

MATU FUJI, M. and MORI, K.

On the Economic Advantages and Disadvantages of the Pig Raising
by the Home-Made Forage.

はじめに

我が国の主要畑作物である甘しよ、麦は国際的な競争の激化と、国内的にも消費構造の変化に伴う需要の低下のもとでは、従来行なわれてきた甘しよ、麦そのものを直接販売するような形では農家所得を向上させることは困難だと思われる。

そこで、これを飼料化した肉畜経営が考えられよう。

これら甘しよ、麦等を飼料化して養豚経営を行なっている吉井営農実験農場の41年度の実績でみると、自給飼料を肉豚に仕向けることによって農業所得の向上が認められるので報告する。

自給飼料養豚経営のシステム

こゝにいう自給飼料養豚とは、自家生産した甘しよ、麦等を肉豚に仕向けて肥育を行なうことをいう。

この場合の肉豚一頭当りの給与量は、生体重90kg仕上げとして、自給の甘しよ 400kg、麦30kgと、購

入飼料のふすま60kg、米ぬか22.5kg、大豆粕22.5kg、魚粉15kgとなりDCP32kg、TDN 200kgが大体の標準とされている。

吉井農場での自給飼料および子豚の生産

本農場では水田53a、普通畑83aに麦64a、甘しよ72a、飼料作物11aを作付収穫し、家畜は繁殖豚3頭により子豚を生産し、肉豚35頭を出荷した。

このように本農場は自給飼料と子豚の迂回生産による肉豚経営がその主体をなすものである。

肉豚に仕向けた子豚および自給飼料の生産費用をみると第1表のとおりである。

各作目のうちで問題点をあげれば、麦では10a当りの収量が低いため費用が割高になっていること、甘しよでは労働時間が多いため(10a当り189時間)生産費が高くなっている。これらは、いずれも本農場の生産基盤が悪いことに基因している。

第1表 各作目の生産費用

作 目 名	麦	甘しよ	飼料作物	仔 豚	
面積	64 a	72	11	3 頭	
労働時間	586 時	1,359	45	455	
収 量	単 位 当 り	189 kg	2,868	2,600	17 頭
	総 量	1,207 kg	20,650	2,870	51 頭
経 営 費	現 金	26,307 円	56,825	2,667	123,173
	償 却 費	14,363 円	9,089	1,516	15,416
	小 計	40,670 円	65,914	4,183	138,589
地 代	7,206 円	6,518	1,419	432	
資 本 利 子	11,136 円	13,586	1,913	19,648	
家 族 労 働 見 積 額	46,587 円	120,124	3,578	36,173	
合 計	105,599 円	206,142	11,093	194,842	
単位当費用	経 営 費	33.7 円	3.2	1.4	2,717
	生 産 費	87.5 円	10.0	3.9	3,820

第 2 表 肉 豚 の 生 産 費 用

区 分				経 営 費	生 産 費	時 価	備 考
飼 生	養 産	頭 数	38	38	38		
		頭 数	35	35	35		
粗 収 益	販 売 増	頭 金 額	575, 145	575, 145	575, 145		1頭当16, 443円
		増 加 額 計	21, 969	21, 969	21, 969		3頭増飼分
生 産 費 用	現 金 償 却	素 飼 料	—	—	—		フスマ 1,094kg 米ヌカ 2,501kg 魚 粕 983kg 大豆粕 10kg その他
		家 畜 飼 料	228, 502	228, 502	228, 502		
		光 熱 燃 料	5, 050	5, 050	5, 050		
		脂 材 物 料	2, 000	2, 000	2, 000		
		建 築 機 具	3, 180	3, 180	3, 180		
		販 売 諸 掛 計	—	—	—		
		農 機 具 掛	1, 150	1, 150	1, 150		
		販 売 諸 掛 計	28, 980	28, 980	28, 980	1頭当 828円	
		償 却 費	268, 862	268, 862	268, 862	1頭当 7, 468円	
		自 給 飼 料	12, 081	12, 081	12, 081		
地 資 本 利 子 計	代 子 計	自 給 飼 料	19, 477	19, 477	19, 477		245時間 時間当79.5円 甘しよ 12,034kg 麦 590kg 飼料 1,900kg
		素 飼 料	120, 612	179, 512	164, 274		
		計	60, 239	179, 375	123, 672		
地 資 本 利 子 計	180, 851	378, 364	287, 946				
農 業 所 得 潤	地 資 本 利 子 計	461, 794	432	432			
農 利	業 所 得 潤	135, 320	685, 949	568, 889			
			△ 88, 835	28, 225			

自給飼料養豚の経済性

第2表は肉豚の生産費用をみるために作成した。ここでいう時価とは、自給した素豚、飼料を時価に見積ったらどうなるかという意味である。

年間の飼養頭数は38頭で、そのうち35頭を出荷販売した。

肉豚経営でまず問題になるのは飼料費であるが、本農場の一頭当り購入飼料費は6,347円となり、自給飼料養豚としては若干高くなっている。(一頭当りの数字は販売諸掛を除いては3頭増飼分を1頭と見なし、36頭で計算した。以下同じ)。

これは自給飼料の数量をみても判るとおり、一頭当り甘しよ334kg、麦16kgとなり、特に麦の給与量が少なかった。この原因は麦の生産が予定量をはるかに下廻ったからである。

なお供与した飼料の一頭当り成分量はDCP33kg、TDN229kgとなつて、TDNが標準量を上廻った。

第2表によれば経営費における農業所得は135,320円であるが、これは自給飼料生産による所得+素豚生産による所得+肉豚生産による所得からなる混合

所得である。

この農業所得から自給飼料生産および素豚生産の所得を算出するとすれば、各々の時価から経営費を差引いたものとなり、自給飼料生産の所得は63,433円、素豚生産による所得は43,662円となる。

したがって肉豚生産による所得は、経営費における農業所得—(自給飼料生産による所得+素豚生産による所得) = 28,225円 = 時価における農業所得となる。

この肉豚生産の所得は一頭当り784円、一日当りでは922円になった。

なお肉豚肥育に要した飼料を全量購入したとすれば、かりに一頭当りのDCP所要量を200kgとしても10,745円となる。(飼料のDCP成分量65%として飼料の全量は307kg、kg当り単価を35円とした場合)したがって飼料費の総額は10,745円×36頭 = 386,820円になる。

飼料費を除く他の費用が等しいものと仮定すれば、肉豚の所得は597,114円—603,535円 = △6,421円となろう。

生産費においてかなりの損失が計上されているが、これはすでにのべたとおり、自給飼料の生産費が高くついたこともあるが、豚価自体も安かった。

この赤字を補うためには一頭当りの販売価格が、3,000円程度上昇すればよい。これは生体重90kg、歩溜り65%とした場合にkg当りの枝肉価格は336円となり通常期待できる数値である。

考 察

自給飼料養豚の経済性を検討する場合、何をもちいて判断の指標とすべきかという点であるが、ここでは肉豚生産による所得をもって検討を進めたい。

つまり自給飼料養豚を行なうことによって、自給飼料生産による所得と肉豚生産による所得を同時に実現できなければならない。

このことは自給飼料時価の高低によって、自給飼料養豚の成否がかけられているともいえよう。

本農場での自給飼料の時価はkg当り甘しよ8円、

麦40円、飼料作物2円としたが、自給飼料がこの程度の時価である限りにおいては自給飼料養豚が成立し得る。

そのことはまた、自給飼料の生産が上記の時価で十分な所得を生み出すことが出来れば、他の農家が自給飼料の生産を担当してもよいことになる。

いずれにしても、上記の時価が実現される限りにおいては、ただ単に普通作物を収穫販売するよりも、これを肉豚に直結した自給飼料養豚を行なうことによって、農業所得の増大を図ることが望ましい。

しかしながら自給飼料養豚は購入飼料養豚と比較すると、次のような難点があるといわれている。

1. 飼料の調理、給与に時間がかかる。
2. 糞尿の処理に時間がかかる。
3. 飼養期間が長くなること。

これらはいずれも飼養頭数規模を規制する要因となり、生産性向上の面で問題がある。

